学校事務労働者、この特異な存在

《青森県学校事務労働組合結成5周年記念講演》
一九九五年三月四日・弘前にて

はじめに

このように、みなさんの前でお話しするのは、多分これが最後だと思いますので、今日は、これまで私がいろんなところに、例えば埼玉とか群馬とかに呼ばれてお話ししたことを、全部まとめてしゃべってしまおうと思います。その話はもう聞いたと言う方がおられると思いますが、ご容赦下さい。

驕り高ぶっていた私

私は、一九六〇年（昭和三五年）に長崎県庁に入りまして、最初の係が国庫負担の担当でした。それも「箱もの」で、学校建築に係る国庫補助金を付ける係だったのですが、その当時は、今の団塊の世代が小中学生の頃で、クラスはどこも満杯、一クラスに六〇人も詰め込むという状態で、教室の後ろに通路がない。市町村は、学校の増築に追われているといった時代でした。ですから、「すし詰め学級の解消」ということで、補助金の

申請は目白押し、審査をする我々も、県内の学校を跳び回るといった忙しさでした。

私は一九才と若かったので、他の人が行きたがらない対馬とか五島列島とか離島ばかりを回されていたのですが、対馬などは、まだ空港がなかったので、出張も三日がかりです。まず夜行で博多まで行き、翌日の朝八時の船に乗ってお昼頃に壱岐に着きます。それからさらに玄界灘を船に揺られて、対馬に着くのが夕方の五時になります。この玄界灘は、その昔、元寇の役の際に、神風が吹いたといわれるくらいですから、船は大揺れです。ゲーゲー吐く人が多いのですが、私は幼い時に島育ちでしたので、平気でした。この頃、出張する時は鉄道賃は二等運賃しか出ませんでしたが、船賃は一等のが出ていましたので、旅費がそれだけ浮くということで、私は進んで島回りを引き受けていました。

さて翌日に、申請の出ている学校を、建築課の人と私の係長とで見て回るのですが、市町村の関係者は補助金を獲得しようと必死です。危険校舎の改築には、危険度が高いという条件が必要なのですが、これは校舎の傾き具合で調べます。いつだったか、こんなことがありました。私たちが到着する前に、村民挙げて校舎に綱を回し、えんやこ～らと引っ張ったというのです。どの市町村も苦しい財政ですから、学校一つ建てるということは大変なことなんですね。気持ちは分かります。でもまあ、この村はそのことがバレたので駄目でしたが。

夜になると、もっと大変です。宴会場の上座に座らされ、村長から村会議員から地元の有力者らがずらりと顔を揃え、腹ふくれるほど私たちに飲ませるのです。ある村では、旅館に帰ってからも、入れ墨をしたおにいさんが一升瓶を持って押し掛けて来て、脅し半分で迫られたこともありました。

この、公務員になっての最初の体験は、私にとってはマイナスでした。県の役人って、こんなに実入りのいいものなのかと自分で思い込んでしまったんですね。旅館代も村が出してくれるし、この頃は、毎月給料を二カ月分もらっているようなものでした。この驕りが私の態度を横柄なものにし、補助金申請の審査会などでは、

間違いの多い市町村の担当者を怒鳴りつけるという、今から思うと恥ずかしい振る舞いを、私はしていたのです。

しかしその後、私の驕りを諌めるような出来事がありました。私が就職した年の秋に、大村市でタクシー会社の争議が起こり、長期化しました。長崎県評と大村地区労が全県の労働者に支援を呼び掛け、私も長崎県職の動員で支援に駆けつけました。三千人もが結集したその会場で、私はうしろからポンと肩を叩かれました。「酒井さん、よく来てくれたね――」。中年の鉢巻姿の人が、にこにこしながら立っていました。そして彼は、その足で壇上に上がり演説を始めたのです。大村地区労の副議長であり、タクシー争議の実行委員長だと、紹介されていました。見事な演説でした。彼の演説で会場は盛り上がり、三千人が拳を振り上げて「団結がんばろう！」の声をとどろかせたのです。

彼の演説を聞いている間、私は顔を上げられませんでした。彼は、大村市の教育委員会の職員で、補助金申請の審査会場で、私が怒鳴りつけた人だったのです。このタクシー争議は二ヵ月後に全面勝利を勝ち取って終わりました。

親切な公務員になった私

それから、私の公務員としての態度は、ガラリと変わりました。いわゆる、親切な公務員に変身したのです。そして組合活動にも積極的に参加するようになりました。長崎県職では青年部の先頭に立ち、この年には、有名な三池闘争も始まりましたので、青年部を率いてここにも駆けつけました。

三年目に、私は教育事務所に異動となり、ここで初めて学校事務職員なる人たちと巡り逢うことになります。

仕事は、給与の審査と支給事務で、大村市・諫早市・島原市と島原半島のすべての学校を担当していました。さらに、若いということで、退職手当と退職年金も担当させられました。

この教育事務所の五年間は、とても楽しく仕事ができ、学校事務職員の方々とも親しくお付き合いをすることができました。給与事務がまだ手書きの頃で全校に事務職員が配置されていませんでしたので、事務職員のいない学校は、教頭が事務をやっていました。教頭は事務に慣れていませんから、ボーナスや給与改定の作業の時などは、現地に会場を取り、私も一泊でそこに出張して、みんなでわぁっと寄ってたかって作業を進めるのです。なにしろ、給与改定の内訳書などは、フンドシと言って、二メートル位になりますから、作業は大変なのですが、助け合ってやる、その雰囲気がよくて、結構楽しいものでした。コンピュータ化されていない時期には、こういう面白みがあったんですね。

そして作業が終わると、みんなが一つの旅館に泊まり込んで、飲めや唄えの大宴会です。もちろんここでは、私は飲み代も宿泊料もちゃんと払っていましたよ。この頃、学校事務職員には面白い経歴のある方が結構いまして、例えば全国の灯台を渡り歩いてきた人とか、戦争中は特高をやっていたとかね。その人たちの苦労話を宴会の席で聞くのを、私は楽しみにしていました。

総じてこの五年間、親切な公務員になった私は、学校事務職員の人たちにもできるだけ親切に対応したつもりです。

私が、一九六七年二月九日に会費制の人前結婚式を行った際に、私の担当する地区の学校事務職員は、その八割がこの披露宴に参加して、祝ってくれました。会費が二五〇円と格安であったということ、この日をもって私が長崎を離れるということもあったとは思いますが、私が、いつも親切な態度で接していたということも、あったんじゃないかと思います。

三度躓いた私

この教育事務所の時代に、非常に興味のある二つの「誘惑」がありました。一つは、前の職場の国庫負担の係長から、私を翌年度に係長にしてあげる、という誘いを持ち掛けられたことです。この係長は、その時は課長補佐になっていて、翌年に課長になることが決まっていましたので、課長になったら、私を係長に推薦するというものです。長崎県庁の人事は、東京のように試験制度はなく、すべて情実で行われていましたので、こういうことも可能だったんですね。「これが実現すると、君は県庁始まって以来、二番目に若い係長ということになる」。一番若くして係長になった人は、副知事の娘を嫁にもらった人だということでした。「ただし、これには条件があるよ」と言って、彼が持ち出したものは「組合活動を一切やめろ」でした。この人は、高教組の書記長をしていて、当局から引き抜かれて係長になった人で（長崎県はこういうことをよくやるんです）、いわば、鮮やかな転身をした人だったんです。組合活動を熱心にやり始めていた私は「あなたのような裏切り者に推薦なんかしてもらいたくない！」と言って、即座にこれを断りました。

もう一つの誘いは、組合からありました。県職の本庁支部の書記長をやってくれないかというものです。長崎県職は五〇〇〇人の組合です。その内、本庁支部は三〇〇〇人を擁していましたから、これだって立派な役職です。

実は、ここに至るまでには、ちょっとしたいきさつがありました。その当時組合の中央委員会（大会に次ぐ議決機関）は二〇〇人の定数なのですが、定数不足でしばしば流会を繰り返していまして、たまりかねた執行部が、一五人に一人の定数を三〇人に一人の定数に変えようと提案したことがあったんです。これに対して私が、それは組合の弱体化につながるから駄目だという修正案を出しまして（中央委員会で修正案が出たのは、

これが初めてだったそうです）これを採決に付したところ、賛否同数となり、議長が決するところとなったのですが、議長が二人いて、これがまた意見が分かれてしまい、結局酒井さんと執行部で協議して適当に決めてくれという、変な結果になってしまいました。

で、結論は執行部との話し合いの結果、中を取って二〇人に一人ということで落ち着いたのですが、その頃から私は、執行部に目を付けられていたらしいのです。ですが、書記長をやってくれないかという話があったのが一九六七年の一月で、二月九日には私はさっさと結婚式を挙げ、長崎を離れてしまいました。披露宴の時に挨拶した当時の書記長が悔しがってましたよ。その人は今、県会議員になっているんですが。

私に去られてしまったので、県会議員になった書記長のあとを継いだのが、なんと私の高校時代の同級生。彼が生徒会長で、私が書記というコンビだったのですが、彼もまた、書記長・副委員長を何年か務めた後、市会議員になりました。今度の春の地方選挙では、県会議員に挑戦するということです。多分、今の県会議員が国会議員に挑戦するのでしょう。社会党が無くなりそうな時にそんなことして大丈夫なのかねぇ、と私は言っているのですが。ただ、県職は組織票を持っていますから、選挙には強いですよ。村山さんもこのようにして自治労出身の議員として国会に出てきたんでしょうね。

私ね。このごろ時々、後悔する時があるんですよ。俺は、これまでの人生で一番大事な二〇才代に、三回躓いたなぁと。

一回目は、係長の話があった時。この時に係長を引き受けていれば、今頃は県の部長位にはなっていたんではないかと。現に、私に係長を勧めたその人は最後は人事委員会の事務局長という部長クラスでした。私のは、二五才で係長ですからね。惜しいことをしました。もっとも、鈴木都知事は二八才で内務省から長崎県の水産課長に天下ったそうで、上には上があるものですが。

二回目は、二六才で書記長を頼まれた時。これも引き受けていれば、今頃は県会議員になって、次は国会に挑戦ということになっていたかもしれません。そんなにうまく行かないですかね。もっとも、このときは結婚を控えていたわけですから、まさか、恋人を振り切って逃げたりはしなかったでしょう。

三回目の躓きは何かというと、それはもちろん、都学労を創ったことです。二九才でした。これで私は、二度と陽の目を見ることのない奈落の底へ自らを突き落としてしまいました。人生って、分からないものですね。

東京に出て来た私

一九六七年二月一六日に、私は東京都に繰上げ採用になりました。長崎県の退職が二月一五日。年金期間では引き続いていますので、もう三六年も公務員をやっていることになります。

その頃、東京都の採用試験は都庁か学校事務のどちらかを選ぶ方式だったのですが、私は躊躇することなく学校事務を選びました。役所は、もう経験したからいいやという気持もあったのですが、本音は、受験勉強の期間が婚約してから三ヵ月しかなかったことと、競争率が一七倍と高かったことから、こちらの方が受かりやすいんではないかと、学校事務を選んだのです。女房の親は、そんなに遠い長崎くんだりまで娘はやれない、と言っていましたので、これに受からなければ愛する人と結婚できないと、受験勉強は必死の思いでした。

学校事務の募集人員は三〇〇名、私は二九九番で合格の札を手にしました。危ないところでした。普通だと、一番の合格者から順に面接して採用していくのですが、私の場合は既に前歴があるということから、トップの採用で、北区の堀船中学校というところに勤め始めました。

東京に出て来たはなから、私はショッキングな体験をしました。一ヵ月後の三月一〇日に女房の兄に連れら

れて、成田に行ったのです。三里塚闘争というものを、私は初めて観ました。学生が空港公団を攻める、機動隊がそれを追っかける、その機動隊を阻止しようと労働者が道路いっぱいに座り込む、という現場を目のあたりにしたのです。座り込んだ労働者の部隊を、機動隊が警棒を振るいながら排除にかかります。私の前にいた労働者は、警棒を口の中に突っ込まれ、顎が外れてしまいました。私は怖くて怖くて丸くなっていましたが、そのうちに順番が来て、一〇人位の機動隊員にポカポカと殴られた末、道路の外につまみ出されました。身体中がアザだらけになりました。

この日の事件は、解散しようとする反対派の集会に機動隊が殴り込みを掛け国会議員がケガをしたということで、あとで問題になった、三里塚では最初の大きな衝突でした。機動隊が集会をしていた人たちに石を投げたのです。私の隣に座り込んでいた宮城反戦の人は、その大きな石を頭にまともに食らって、頭蓋骨陥没で意識不明の重体になってしまいました。あの石があと三〇センチずれていたらと考えると、身の毛がよだつ思いです。その頃はまだ、労働者はヘルメットをかぶっていませんでしたから。

この日、私は、もう絶対にこんな怖い場面には行くまいと心に誓いました。ところが、職場のすぐ近くの王子野戦病院というところで、また、反戦闘争が始まったのです。夕方になると、どこからともなく群衆が集まって来て、集会とデモを始めるのです。職場からの帰りがけ、私はいつのまにか群衆の一員となり、またも怖い場面を観てしまいました。今度は暗闇の中で、誰かが投げた石に当たって、人が一人死んだのです。考えてみると、そういう時代だったんですね。一九六七年ですもの。全国で、学園紛争が荒れ狂っていました。

翌年、江戸川区の江戸川小学校に異動した私は、六九年には早くも都教組の中で反戦系の活動家となり、「江教組を強くする会」という組織のキャップとして、ピンクの旗を振りかざして街頭闘争に出かけるようになっていました。あの、東大の安田講堂が陥落する三日前にも集会に行ってました。そうそう、給特法の時、

日教組会館にも、この部隊で突っ込みました。どうもいけませんね。身体の血が騒ぐんですよ。怖いもの見たさですかね。

おっと、前置きが長くなってしまいました。そろそろ本論に入りましょう。

机騒動に勝利する

江戸川小学校は、江戸川べりの不法建築地帯に出来た新設校で、当時二三区の中では二番目に大きいと言われ、一三〇〇名の児童がいましたが、それでもまだ増え続けていました。なにしろ翌々年には、そこからまた新設校が出来た位ですから。したがって職員も七〇人近くおり、給料日には行列をつくるほどで、職員室も満杯、机がひしめきあっていました。

赴任した翌年の四月六日。出勤したら、職員室にある私と事務補助員の机が廊下に出されていました。教頭に訊いたら、教員がまた増えて、職員室が狭くなったからと言うのです。この机は、朝の打ち合わせや職員会議の時に、私と相棒が座るために置いてあるもので、「それなら、職員朝会も職員会議も我々は出なくていいんですね。事務上の連絡もあなたがやってくれるんですね」と私が言ったところ、教頭は、それは困ると言う。椅子だけ持ってきて、連絡はやってくれ、職員会議にも出てくれと、勝手なことを言うのです。

怒った私は、始業式の後に、仲のよかった用務員三名と事務補助員とで机を強引に職員室に入れました。教員の机をガタガタと押して動かすので、教員がみんなあきれていましたが、工夫をすればちゃんと入るのです。教頭も呆然と見守っていましたが、その時は何も言いませんでした。

ところが、翌日出勤したら、また廊下に出されているのです。前日、我々が帰った後に、教頭と教務主任が

出したらしいのです。頭に来た私は、「もしもこれが教員がもっと増えていたのだとしたら、あんたは教員の机も出すのか」と怒鳴ったら、教頭は困った顔をし、「でも、窮屈だから――」と小さな声で答えるだけでした。この日も入学式が終わった後、私たちと用務員は職員室の机をガタガタ動かし、我々の机を中に入れました。

しかし、その翌日もまた、机は廊下に出ていました。教頭は、今度は理由を考えていました。「酒井さんたちは事務室に机があるからいいじゃないですか」。堪忍袋の緒を切った私は、用務員と相談の上、ある策略をめぐらしたのです。今度は昼休みに、教員たちがみんな見ている前で、校長の机を廊下に出そうとしました。教頭がびっくり仰天し「なんてことをするんだ！」と叫んだので、私は「校長だって校長室に机があるんだから、いいじゃないか。校長も椅子を持ってくれば」と平然と言ってのけ、実力を行使しました。これにはさすがの教頭も参ったらしく、「じゃあ、酒井さん、いいよ」と、しぶしぶ我々の机を入れることを認めました。

そのあと、教頭が席を外している間に、私たちは校長と我々の机を職員室の中に入れたのですが、この時に、事前に用務員と打ち合わせていた策略を実行しました。余っていた机を一つ多く我々の机の横に入れたのです。戻って来た教頭は、そのことに気が付きませんでした。

翌日の朝の打ち合わせの時、一番年配の用務員が、その机に座っていました。「あれっ？」と教頭が驚いたので、その用務員がすかさず「我々も今日一日の学校の動きを知っておく必要があるんで、俺が今日から現業の代表で出ることにしたよ」と言うと、教頭は、その時に初めて机が一つ増えたことに気付き、目を丸くしながら「あぁ～、うん、そうだね」と、仕方なさそうに頷いていました。職員朝会の後、用務員室に行った私たちは、万歳をしてこの勝利を喜びました。年配の用務員は、その後、職員会議にも現業職の代表として出席するようになりました。